

# こんな夢を見た



こんな夢を見た。

私は空に浮かび、五月の琵琶湖岸を上空から見ている。湖岸道路が走り、田んぼには水が張られ、田植え機が忙しく動いている。ところがその湖岸道路と田んぼの間には幅一キロほどの帯状のグリーンベルトが続いているのが見える。「減反地で表が植わっているのかな」と思うところではない。表にしては大きい。これはヨシである。巨大な帯状のヨシ原である。どうしてこんなところに帯状のヨシ原があるのだろうか。そのヨシ原の近くには多くのビニールハウスや、別荘地らしい洋風建築の区画も見える。「なんだ、この光景は……」

このヨシ原はたつぷりと水に浸かっている。なんと田んぼから出た排水が琵琶湖に出る前に堰き止められ、ポンプで上げられてヨシ原に流入しているのだ。田んぼの排水、つまり養分の余りと水を取り込み、ヨシがぐんぐん成長している。代掻きの時や田植えの時の排水が河川に流れ込んだものが、再びヨシ原に入るシステムになっているのだ。

ヨシ原の中には、血管のように多くの水路が走っているの見える。大きなヨシ原の排水を良くするためのものらしい。水路には鳥など多くの生物が往来している。魚の稚魚もたくさん泳いでいる。フナの子魚だ。ここならブラックバスやブルーギルに食べられずに安心して大きくなれる。多くの水生昆虫も棲んでいる。きつとこの水路は、ヨシが大きくなると覆われて、生物にとっては格好の隠れ家となるのだろう。田んぼとはまた別の

意味で、生物の宝庫なんだと思った。

また驚いたのは、このヨシ原の琵琶湖への排水溝である。この排水溝は、緩やかな傾斜で適当な幅があり、魚が産卵のため遡上できるようになっているのだ。たぶん春から水の張られたヨシ原に、この魚道をつたってフナなどが遡上し産卵したに違いない。その上、ヨシというのは成長するのにイネよりさらに多くの養分や水が必要とする。当然入ってくる水より出ていく水は少なくなるのだが、ヨシ原からの排水は驚いたことにきれいな水なのだ。ヨシ原で水質浄化されているのである。これは巨大な農業排水の浄化槽ではないか。

気がつく琵琶湖はともきれいになっていく。六月になった。気持ちのよい空を、私はまた飛んでいる。

ヨシ原の排水口が切られた。少し大きくなった魚の稚魚が琵琶湖へ放たれていく。ヨシの高さも三メートルに達している。

この立派なヨシ原に、少し前に南の国から来たオオヨシキリが棲みついている。大きなヨシ原なので多くの仲間が棲みやすく、盛んに子育てを行っている。大きなヨシ原は鳥たちにも都合が良さそうだ。

また、私は空を飛んでいる。今度は冬の空だ。ヨシ刈りの風景が見える。鎌や草刈り機でのヨシ刈りは行われていない。ローツバ製らしいヨシ刈り機が動いている。運転者を乗せてヨシを刈り込んでいき、結束までしている機械のようだ。このように直線が長い大きなヨシ原であると、こ

のような機械が効率的なのだろう。このヨシは厳しい波浪もなく、養分や水は豊富、土壌も良く、元来陸生の植物であるヨシに好適な条件であるので、長さは五メートル近くまで生育する。冬にはほとんど葉が落ちてしまつという高品質のヨシが収穫できているようだ。そして、野鳥への配慮であるうか、大きく刈り残してある区画もある。

空から降りてみた。近くのビニールハウスで作業しているパナマ帽をかぶつたおじさんに聞いてみた。

「おじさん、この辺にはきれいなヨシが多いね。青っぽいのがピンクのものもありますね」

「これはな、ヨシを品種改良してできたもんや。さまざまな色合いや細さ、堅さのヨシが栽培されて、伝統的なスタレとかヨシ屋根のほかに現代の住宅の家具や内装、おもちゃ、楽器にも使われるようになったんやで」

「ところで、おじさんはハウスで何を栽培しているの」

「京都や大阪みたいな都会向けの高級な花を栽培してるんや」

ハウス内にはきれいな花が多く並んでいる。

「これは隣のヨシ原の高つ売れんヨシをコンポスト（堆肥）にしているんなもんと混ぜて、花を育てる土をつくって栽培してるんや。何をどんなに混ぜるかが高つ売れる花をつくるポイントやで。わしは、前は大阪に住んどつたんやけどな、十年前にここでハウスで花を始めたんや。二、三年前からよう売れて少しもつかつたさかいに、そ

「この別荘地に家を買ってな」

確かに別荘地だが少し変わっている。洋風の建築物であるが、ヨシ葺きなのである。

「かわいらしい家やろ。そしてな、この別荘地の建築業者が言うところだ。ヨシ原の一区画は、この別荘地のヨシ屋根用なんや。長いことして屋根が腐ってきたら、ヨシを刈って葺き直してくれ言うところだわ。ハハハハハ、おもしろいやろ」

## ヨシを使うところのこと

「こんな夢を見た」のような素晴らしい風景が滋賀県に広がればいいと思いませんか。オランダ人のホーリングス氏が述べられたような、ヨシ屋根の集合住宅がたくさんあるような国土も面白いと思いませんか。前述のように水環境の保全、特にヨシ原の保全、刈り取りのためにはヨシの資源としての利用が不可欠です。これにより、ヨシ原の刈り取りが行われ、ヨシ産業が発達し、ヨシが生活に多く入り込むことで多くの人がヨシに親しむこととなります。ただ、かつてのようなヨシ産業の復興を試みるにしても、現在の日本の状況では打破できない問題が山積しているので、遠く海外の現状を参考にし、希望を見いだすことにしま

「だいぶ前に、田んぼを減反せなあかん時に、琵琶湖のまわりの田んぼを大昔みたいにヨシ原に戻しよったんや。はじめは田んぼの排水をヨシ原に吸わせて浄化して、琵琶湖できれいにしてよつということやったんやが。ただ刈らんと逆効果やから、刈って有効利用を考えたんや。その後、機械でヨシが安くて刈れるようになったし、ヨシを上手に使って金儲けもできるようになったし、琵琶

湖はきれいになったし、ホンマによかつたわ」  
私は幸せな気持ちになった。するとまわりの季節は春へと変わった。同時にフワフワと私の体は浮き始めた。緑のヨシ原と外側に大きな菜の花畑、その向こうに続く水田、故郷の山々を見ながら春の空高く昇っていった。私は、これが近い未来だと確信した。私は、足下のきれいな琵琶湖を眺め、いつまでもいつまでも空に昇っていった。

した。

オランダの人は、ヨシ屋根の造形美に可能性を見いだし、ヨシ屋根産業を発展させています。従来の伝統的なヨシ屋根のスタイルに固執せず、壁面やアパートのてっぺん、テーマパークのオブジェなど、遊びとも思えるほど自由自在にヨシを展開しています。その一方、集合住宅化してコスト面を考えたり、耐火・耐熱面での配慮を行っています。また、多くの業者を集めて団体をつくり、社会への影響力を強めています。

また、中国の製紙工場では非木材紙が中心です。竹やワラ、ケナフ、ヨシなどを使用して紙を製造しています。中国東北部にある丹東の製紙工場は

大きなヨシ原の近くにあり、戦後一貫してヨシの紙を生産してきました。一旦切り倒すと再生に手間のかかる木材を原料に使用せず、一年で再生可能なヨシを利用して紙を生産しています。当財団もヨシ紙の生産に設立時から携わってきましたが、国内での生産にはさまざまな障壁がありますので、コスト面を含め中国でのヨシ紙の生産に大きな魅力を感じます。

ヨシが世界に分布し、人々の生活に結びついている限りは、さまざまな知恵が存在します。これらの人々と交流し、ともに学び、考え、試みることで、ヨシにかかわった社会性の高い活動が開発できるかもしれません。そうすることで、無理なく環境も保全できるような社会を再構築できないでしょうか。これが、財団法人淡海環境保全財団の、いや世界中のヨシにかかわる人々に与えられた二十一世紀の使命ではないかと考えるのです。